

I 調査の概要

1 調査の目的

(1) 本県児童生徒の学力についての実態把握

小学5年生及び中学2年生の学習内容の定着の状況を調査することによって、定着が不十分な教科や単元を把握するとともに、授業理解度や家庭学習時間等の実態を把握する。

(2) 教育施策の企画・立案

結果分析を基に、教員の教科指導力の向上と児童生徒の学習習慣の形成を図るための教育施策の成果を検証し、新たな教育施策の企画・立案を行う。

(3) 授業改善等の具体の実践による学力の向上

県が示した授業改善の方策及び各教育事務所、各市町村、各学校独自の結果分析に基づく授業改善の方策に基づき、各段階において具体の取組を展開し、本県児童生徒の学力の向上を図る。

2 対象学年及び対象教科

(1) 学習状況調査

今年度は県単独で学習状況調査を実施した。作成に当たっては、継続性を考慮し、昨年度まで3年間実施してきた統一学力テストを踏まえた経年比較問題をある程度加えながらも、問題文等の示す情報を整理して読み解く力について調査するため、出題傾向を変えて実施している。

校種	学年	教科	内容	学校数	人数
小学校	第5学年	国語	第5学年の夏季休業日前までに学習した内容	324校	12,330人
		社会			12,323人
		算数			12,348人
		理科			12,344人
中学校	第2学年	国語	第2学年の夏季休業日前までに学習した内容	156校	11,908人
		社会			11,903人
		数学			11,897人
		理科			11,889人
		英語			11,879人

(2) 学習意識調査

① 児童生徒対象

校種	学年	内容	学校数	人数
小学校	第5学年	学習に対する意識、学校での学習状況、家庭での学習状況等	324校	12,364人
中学校	第2学年		156校	11,884人

② 教員対象

校種	対象	内容	学校数	人数
小学校	第5学年学級担任	指導法の工夫、学習状況調査の活用、家庭学習の習慣形成への働きかけ等	324校	494人
中学校	第2学年教科担任 国・社・数・理・英、各1名		156校	780人

③ 保護者調査

校種	対象	内容	学校数	人数
小学校	第5学年保護者の10%程度	保護者として学校に期待する指導、家庭での子どもの学習や生活の様子等	75校	1,620人
中学校	第2学年保護者の10%程度		60校	1,652人

3 調査実施期日・時間

(1) 期日 小学校 平成19年10月25日(木)と10月26日(金)の2日間で実施

中学校 平成19年10月25日(木)又は10月26日(金)のいずれか1日で実施

(2) 時間 1教科、小学校45分、中学校50分とする。学習意識調査は10分程度とする。

4 調査結果の取扱

学習状況調査及び学習意識調査の調査結果については、学力向上の取組の一層の充実を図るため、以下の取扱を基本とする。

(1) 児童生徒調査（学習状況調査及び学習意識調査）

- ① 県全体及び地域別の状況のほか、市町村別の問題ごと等の正答率の状況を公表する。
- ② 各学校の状況については、各学校を所管する市町村教育委員会に情報を提供する。
- ③ 各市町村教育委員会及び各学校においては、結果情報を基に、児童生徒の学習の定着状況及び学習意識について十分な分析を行い、授業改善等の具体の対応と併せて保護者に示すなど、学力向上の取組に活用するとともに、説明責任を果たす。
- ④ 十分な教育的配慮の下、児童生徒一人一人に学習状況調査の結果を提供し、学習についての振り返りを支援するなど、児童生徒の学習改善を促進する。

(2) 教員・保護者意識調査

- ① 教員調査：県全体の状況を公表
- ② 保護者調査：県全体の状況を公表

5 結果評価に当たっての基本的な考え方

県教育委員会では、県独自に学習状況調査を開始した平成14年度から、「正答率60%以上の問題の割合が6割以上」を「学習内容の定着の目安」としており、平成19年度の調査においてもその指標を分析に生かしている。また、文部科学省が4月に実施した「全国学力・学習状況調査」において用いられた「平均正答率」も分析に生かしている。

なお、「正答率60%以上の問題の割合」は宮城県教育委員会が平成17年3月に策定した「宮城県学力向上推進プログラム」において「学力の定着状況」についての目標ともなっている。

6 結果評価に当たっての留意事項

- (1) 今年度の学習状況調査においては、経年比較問題をある程度加えながらも、問題文等の示す情報を整理して読み解く力について調査するため、出題傾向を変えて実施している。
- (2) 今年度の調査結果については、4県合同の統一学力テストが終了したことにより、他県との比較をしていない。また、仙台市が参加していないことを踏まえて評価をする必要がある。

なお、対象学年や実施内容が違うため、一概に比較はできないが、参考までに、「全国学力・学習状況調査」と本調査の問題について、比較考察を行った。

7 用語説明

(1) 「正答率」

問題ごとに、実際に正答した児童生徒数を調査者数の合計で割った数値。

(2) 「正答率60%以上の問題の割合」

正答率が60%を超えた問題数を全問題数で割った数値。

(3) 「予想正答率」

県教育委員会が作成した問題について予め設定した正答率であり、学習指導要領に示された内容について、標準的な時間をかけて学んだ場合、個々の問題ごとに正答できることを予想した児童生徒の割合。

なお、過去3年間の統一学力テストの問題と正答率を踏まえている。

- ① 教科ごとの予想正答率は、小・中学校ともに60%～70%を基準とする。
- ② 予想正答率は30%、40%、50%、60%、70%、80%、90%の7段階とする。
- ③ 正答率が「予想正答率を上回ると考えられるもの」または「予想正答率と同程度と考えられるもの」は、この問題に対する達成度は「おおむね良好」といえる。
- ④ 「予想正答率を上回ると考えられる」調査問題と「予想正答率と同程度と考えられる」調査問題の問題数の合計が、全調査問題の半数以上になった場合、学習の実現状況を「おおむね良好」とした。

Ⅱ 平成19年度宮城県学習状況調査・学習意識調査 結果の概要

1 学習状況調査の結果の概要

(1) 正答率60%以上の問題の割合

本県では、平成14年度調査から、「正答率60%以上の問題の割合」を学習内容定着の目安としており、「6割を超えた」場合に、「学習内容がおおむね定着している」としている。

今年度の「正答率60%以上の問題の割合」は、表1及び表3のとおりである。

① 小学校の状況

国語以外の社会、算数、理科で「正答率60%以上の問題」が6割を超えており、4教科全体の平均は68.0%（125問中85問）であった。前年度の結果（仙台市を除く）との比較では、社会と理科で上回り、国語と算数で下回っている。小学校については、基礎的・基本的な内容について概ね定着していると判断している。

表1 小学校 正答率60%以上の問題の割合 (%)

	国語	社会	算数	理科	全体
H19年度	54.8	92.6	63.6	64.7	68.0

【参考】表2 小学校正答率60%以上の問題の割合(仙台市を除く) (%)

	国語	社会	算数	理科	全体
H18年度	67.7	74.1	78.8	62.9	68.3

② 中学校の状況

国語以外の社会、数学、理科、英語で「正答率60%以上の問題」が6割に届かず、「教科全体の平均」は36.9%（160問中59問）であった。前年度の結果（仙台市を除く）との比較は、国語が上回り英語は同じであったが、社会、数学、理科で下回っている。中学校については、基礎的・基本的な内容について一層定着に努める必要がある。

表3 中学校 正答率60%以上の問題の割合 (%)

	国語	社会	数学	理科	英語	全体
H19年度	68.8	27.3	33.3	8.6	50.0	36.9

【参考】表4 中学校正答率60%以上の問題の割合(仙台市を除く) (%)

	国語	社会	数学	理科	英語	全体
H18年度	53.1	33.3	36.7	34.3	50.0	41.3

(2) 平均正答率

① 小学校の状況

4教科の平均正答率は66.9%であり、前年度と比べ0.6ポイント下回っている。また、調査内容が異なるので一概に比較できないが、国調査と比べ、国語では国調査の国語A、Bを下回り、算数は算数Aを下回るもののBを上回っている。

表5 小学校 各教科の平均正答率 (%)

	国語	社会	算数	理科	4教科
H19年度	57.6	77.4	66.4	66.1	66.9

【参考】表6 小学校 各教科の平均正答率(仙台市を除く) (%)

	国語	社会	算数	理科	4教科
H18年度	70.5	69.2	68.5	61.7	67.5

【参考】表7 国調査平均正答率(県の結果・仙台市を除く) (%)

	国語A	国語B	算数A	算数B
H19年度	80.6	61.0	81.1	61.4

※A（主として知識に関する問題） B（活用に関する問題）

② 中学校の状況

5教科の平均正答率は55.0%であり、前年度と比べ3.1ポイント下回っている。また、調査内容が異なるので一概に比較できないが、国調査と比べ、国語A、B、数学A、Bの各問題で平均正答率を下回る結果となった。

表8 平均正答率 (%)

	国語	社会	数学	理科	英語	5教科
H19年度	68.9	52.2	50.7	42.2	60.9	55.0

【参考】表9 平均正答率(仙台市を除く) (%)

	国語	社会	数学	理科	英語	5教科
H18年度	64.8	54.8	54.4	52.7	63.7	58.1

【参考】表10 国調査平均正答率(県の結果・仙台市を除く) (%)

	国語A	国語B	数学A	数学B
H19年度	80.8	71.0	70.3	59.4

※A（主として知識に関する問題） B（活用に関する問題）

(3) 調査結果から分かった特徴的な事項

① 出題形式による正答率から

表 11 出題形式別正答率 (%)

出題形式	小学5年生					中学2年生					
	国語	社会	算数	理科	4教科	国語	社会	数学	理科	英語	5教科
選択式	60.0	80.3	66.6	68.2	68.8	68.2	53.2	57.7	44.0	64.5	57.5
記述式	57.2	69.7	69.1	66.6	65.7	76.1	49.7	48.9	45.0	10.3	46.0
論述式	49.2	85.8	16.8	42.2	48.5	56.2	47.5	24.6	14.9	37.9	36.2

表 12 出題形式別無解答率 (%)

出題形式	小学5年生					中学2年生					
	国語	社会	算数	理科	4教科	国語	社会	数学	理科	英語	5教科
選択式	2.1	1.4	1.0	0.7	1.3	0.6	1.6	4.2	2.2	1.4	2.0
記述式	15.5	7.8	4.0	7.2	8.6	10.5	12.8	15.2	19.1	16.6	14.8
論述式	20.9	4.8	13.8	15.1	13.7	14.7	35.4	35.0	27.8	42.9	31.2

- ・小・中学校とも、選択式の問題の正答率は高く、論述式の問題の正答率が低い結果となった。
- ・全体として、小学校では選択式と記述式の正答率に大きな差はないが、中学校では差が大きい。また、小学校の国語、算数、理科と中学校の国語、理科は選択式、記述式による正答率にあまり差が見られないが、中学校の英語では、選択式に比べ記述式は正答率が大きく低下している。
- ・無解答率は、論述する問題や思考力を問う問題で無解答率が高いなど、読解力や表現力に依然として課題がみられる結果となった。

② 経年比較問題の正答率から

経年比較問題について、正答率 60%以上の問題を分析すると、小学校の国語及び社会では、全ての経年比較問題（小学校国語 6 問、小学校社会 12 問）が正答率 60%を超えるなど、一定の成果が挙げられている。特に、小学校社会科の等高線の問題は、表 13 のように 4 年続けて大きく正答率の向上が見られ、各学校で学習状況調査結果の分析を生かして学習指導を行っていることがうかがえる。

表 13 小学校社会の「等高線を見て傾きを判断する問題」の正答率の変容

H 1 6	H 1 7	H 1 8	H 1 9
45.2%	51.6%	59.9%	66.4%

③ 問題文等の示す情報を整理して読み解く力について

今年度は、「問題文等の示す情報を整理して読み解く力」を把握するため、出題に配慮した。調査結果は、小・中学校とも十分ではなく、特に、中学校理科では思わしくなかった。各学校において、今後とも「情報を整理し読み解く力」を育てていく必要がある。

表 14 問題文等の示す情報を整理して読み解く力を量る問題（小学校）

	国語	社会	算数	理科	4教科
出題数	1	1	3	4	9
正答率 60%以上の問題数	0	1	0	1	2

表 15 問題文等の示す情報を整理して読み解く力を量る問題（中学校）

	国語	社会	数学	理科	英語	5教科
出題数	2	2	2	14	0	20
正答率 60%以上の問題数	2	0	0	0	0	2

(4) 各教科の課題と改善方策

【小学校】

教科	課題	改善の方向
国語	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えや感想等を条件に合わせて書くこと ○叙述に即して読む力を高めること ○表現・理解につながる言語事項の定着を図ること 	<ul style="list-style-type: none"> ○様々な条件のもとで、自分の考えや感想等を書く機会を多く設定する。また、書き方のスキルを定着させるとともに書き直しをさせることによって書く力を高める工夫をする。さらにノート指導の充実を図る。 ○文章全体を通した読みを大切にする。また、複数の言葉に着目したり、文章にもどったりして考える習慣を身に付けさせる指導の工夫をする。 ○漢字やローマ字、表現技法、辞書の活用等、学習したことを授業だけでなく、日常生活においても繰り返し使用する場を増やす。また、定着率の低い漢字、ローマ字等を重点的に取り扱う。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ○県名と県の位置、事象を表す用語等を理解し、正しく記述すること ○文章、図表、グラフ、地形図等の資料を具体的に読み取ること 	<ul style="list-style-type: none"> ○地図帳を活用する機会を増やし、都道府県名については、地図帳で都道府県の名称と位置を確認させる。また、白地図の利用など作業的な活動をとおして、地図を読み取る学習を充実させる。 ○教科書や資料集、グラフや図表などの活用の仕方を充実させ、学び方や調べ方を大切にする授業に努めていく。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ○計算や数量の意味を理解し、計算の必要な具体的な場面と結び付けて理解すること ○数量や図形についての算数的活動を通して、根拠を明確にしながら説明したりする力を身に付けること 	<ul style="list-style-type: none"> ○作業的・体験的な活動など算数的活動を積極的に取り入れるとともに、日常生活と結び付けて考える場を設定する。 ○既習事項を基に、図や式などを用いて自分の考えを書いたり、積極的に算数の用語や記号を使って説明したりする活動を取り入れる。 ○互いの考えの共通点や相違点を整理しながら、簡潔性や能率性などについて観点を明確にして比較・検討させ、数理的処理のよさに気付かせる
理科	<ul style="list-style-type: none"> ○実験結果を図示したり、グラフ化したりするなど、実験の結果を記録・処理する能力を身に付けること ○比較したり関連付けたりして考える力や、考察したことを文章で表現する能力を身に付けること 	<ul style="list-style-type: none"> ○観察、実験に当たっては、児童一人一人が結果を記録したり、グラフに表したりする機会を多く取り入れるとともに、その時間の確保に努める。 ○観察、実験に当たっては、具体的な比較の視点を示して取り組ませたり、関連付けて考察する場を確保したりする。 ○分かったことの一つ一つを確実に整理しながら、仮説や予想、結果や考察、まとめ等を文章で書かせる機会を多く取り入れる。

【中学校】

教科	課題	改善の方向
国語	<ul style="list-style-type: none"> ○条件に従い、構成を工夫して自分の考えを書くこと ○文章の構成や展開を正確にとらえ、内容の理解に役立てること 	<ul style="list-style-type: none"> ○原稿用紙を用いて、条件付き短作文を書かせる指導を多く取り入れる。また、批評的に読んだり、根拠を挙げて話したり書いたりすることを習慣化させる。 ○叙述に即した授業を展開し、文章全体と部分の関連性について言葉を手がかりにとらえさせる。また、長文に親ませる機会を積極的に与える。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ○地図上で、主な国々や都道府県の名称と位置を身に付けること ○歴史の大きな流れの中に各時代を位置付けること ○資料を正確に読み取り、社会的事象の意味等について書く（表現する）力を高めること 	<ul style="list-style-type: none"> ○日常的に地図を活用する習慣を育てるとともに、地図帳等を積極的に授業で活用し、名称と位置を関連付けてとらえさせる。 ○個々の歴史的事象を時代ごとに整理させるとともに、歴史の大きな流れの中で各時代を比較させること。 ○資料の読み取りの視点を明示し、根拠を基に事実を書かせ、まとめさせる活動を取り入れる。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ○円柱や角柱、錘体の体積の求め方について理解させること ○文字を用いて数量間の関係や法則を式に表現したり、式の意味を読み取ったりすることができるようにする。また、文字式を説明に用いることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○展開図から円錐を実際に組み立てる等の数学的活動を積極的に取り入れ、見取り図の側面にあたる部分がおうぎ形になることや底面の円周の長さとおうぎ形の弧の長さが等しいことを実感を持って理解させる。 ○文字を使つての説明では、初めから数学的な形式の整った書き方を求めず、自分の言葉で筋道を立てて説明することに力点を置いた指導が大切である。その後、徐々に形式に慣れさせ、最終的にはきちんとした形で表現できるよう段階を踏んだ指導をする。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎的・基本的な内容との関連を図り、事象をとらえる視点を身に付けさせること ○観察、実験の方法や条件を的確に理解し、実験結果を読み取ること ○学習した内容と、実際の生活の中で見られる事象との関わりを考えさせること 	<ul style="list-style-type: none"> ○事象提示や問題提起の段階において、経験や基礎的・基本的な内容との関連を図り、事象を読み取る視点をもてるようにしていく。 ○観察、実験の方法や条件、資料を的確に理解させるため、モデル化や処理方法を工夫し、課題追究や考察に見通しをもたせる。 ○日常生活の中で見られる様々な事象を、習得した知識や技能を活用し考察させる機会と時間を意図的に確保する。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ○語句や基本構文などの意味を理解し、正しく書く力を身に付けること ○テーマに沿ってまとめた英文を書く力を身に付けること ○長文の概要・要点を理解し、読み取る力を身に付けること 	<ul style="list-style-type: none"> ○英語を聞いたり読んだりする機会を増やし、正しく書く練習を継続的に行い、自分の表現したい英文に取り入れることができるよう語句や基本構文の定着を図る。 ○意図的、段階的に書く活動を小テストで取り入れ、さらに、テーマについて、「話すこと」と関連させながら書く指導を工夫する。 ○英文を読む時間を確保し、事前に内容把握のための手がかりとなる語句や表現を与えたり、設問の仕方を工夫したりするなどして、読み取りの指導を工夫する。

(5) 学習意識調査の結果の概要

学習意識調査については、平成17年度及び18年度の調査内容と同じであり、3年間を比較し、経年変化を示す。

【児童生徒対象調査】 ※○はH18年度比で好転しているもの、●はH18年度比で好転していないもの
 ※調査対象(悉皆): 小学5年生(324校(分校含む): 12,364人)
 ※調査対象(悉皆): 中学2年生(156校(分校含む): 11,884人)

① 学習への意欲

(勉強は大切であると思う、どちらかといえばそう思うと答えた児童生徒) 単位%

		H17	H18	H19
小学校	仙台市除く	91.7	92.2	○93.5(+1.3)
	県全体	91.9	92.2	
中学校	仙台市除く	86.6	88.2	○91.9(+3.7)
	県全体	87.6	88.2	

※「勉強は大切である・どちらかといえばそう思う」と回答した小・中学生の割合は90%を超え、年々向上している。

② 授業の理解度

(授業がよく分かる、だいたい分かると答えた児童生徒) 単位%

		H17	H18	H19
小学校	仙台市除く	74.4	72.2	○74.7(+2.5)
	県全体	75.1	73.2	
中学校	仙台市除く	54.1	53.6	○56.7(+3.1)
	県全体	55.8	55.7	

※「授業がよく分かる・だいたい分かる」と回答した小学生は74.7%、中学生は56.7%であり、平成17・18年度と比べ最も高い。

③ 家庭学習(平日・塾等を含む)

単位%

		時間	H17	H18	H19
小学校	30分未満	県(仙台市除く)	30.0	24.2	24.5(+0.3)
		県全体	29.6	25.2	
	30分～1時間	県(仙台市除く)	32.5	33.3	35.0(+1.7)
		県全体	31.7	32.1	
1時間以上	県(仙台市除く)	37.2	41.6	40.1(-1.5)	
	県全体	38.2	41.8		
中学校	30分未満	県(仙台市除く)	30.4	29.2	27.6(-1.6)
		県全体	28.8	27.5	
	30分～1時間	県(仙台市除く)	19.5	19.9	19.9(0.0)
		県全体	18.2	18.9	
	1時間～2時間	県(仙台市除く)	27.7	28.4	29.2(+0.8)
		県全体	28.2	28.4	
2時間以上	県(仙台市除く)	21.8	21.6	22.7(+1.1)	
	県全体	24.2	24.4		

※「学校以外に、1日だいたいどれくらい勉強しますか」の質問に「30分以上」と回答した小学生は75.1%、「1時間以上」と回答した中学生は51.9%で、年々向上している。

④ 読書時間(平日・30分未満と答えた児童生徒)

単位%

		H17	H18	H19
小学校	県(仙台市除く)	77.2	75.7	○75.5(-0.2)
	県全体	75.3	73.9	
【参考】1時間以上読書する児童		7.4	7.6	○7.9(+0.3)
中学校	県(仙台市除く)	76.9	74.1	○71.1(-3.0)
	県全体	75.4	72.8	
【参考】1時間以上読書する生徒		8.9	9.6	○11.1(+1.5)

※30分未満の小・中学生が年々減少し、1時間以上読書する小・中学生が増加している。

⑤ 朝食をとる習慣(必ずとる、たいていとると答えた児童生徒)

単位%

		H17	H18	H19
小学校	県(仙台市除く)	94.8	95.9	○96.3(+0.4)
	県全体	95.3	96.0	
中学校	県(仙台市除く)	92.7	92.9	●92.8(-0.1)
	県全体	92.8	92.6	

※小・中学生とも9割以上が朝食をとっている。

(参考) 朝食をとる習慣(小学生・「とらないことが多い、全く又はほとんどとらない) 単位%

		H17	H18	H19
小学校	県(仙台市除く)	4.8	3.8	○3.5(-0.3)
	県全体	4.4	3.6	

【教員対象調査】

※H18より増加しているものは○ 減少しているものは●で示す。

※調査対象（抽出）：小学5年生の学級担任（494人）

※調査対象（抽出）：中学2年生の国語、社会、数学、理科、英語の教科担任（780人）

① 学習指導を進める上で留意していること。（項目ごと4段階評価の割合）

（心がけている、どちらかといえば心がけていると回答した教員の割合）

単位%

		小学校		中学校		
		H18	H19	H18	H19	
1	基礎的な知識・技能をきちんと身に付けさせる。	県（仙台市除く） 県全体	99.2 98.9	○99.8 ○99.8	99.8 99.7	●99.3
2	補充的な学習を取り入れる。	県（仙台市除く） 県全体	96.2 95.4	●95.1	91.6 93.2	○94.4
3	発展的な学習を取り入れる。	県（仙台市除く） 県全体	68.1 71.2	●66.2	67.9 71.3	○71.4
4	基礎的な学習事項を反復練習させる。	県（仙台市除く） 県全体	98.8 98.6	○99.0	95.9 95.3	●95.5
5	子ども個々の多様な考えを授業に生かす。	県（仙台市除く） 県全体	94.8 95.3	○95.5	86.9 87.3	○87.1
6	コンピュータを活用する。	県（仙台市除く） 県全体	59.9 64.4	○61.6	22.7 21.8	●21.6
7	体験的な活動を取り入れる。	県（仙台市除く） 県全体	89.1 90.0	●88.9	57.4 57.2	○60.4
8	地域素材・地域人材などを活用する。	県（仙台市除く） 県全体	67.5 68.0	●63.4	28.6 26.7	28.6
9	休み時間や放課後などに個別授業をする。	県（仙台市除く） 県全体	93.3 90.6	●91.5	60.9 61.8	○64.8
10	授業に学習状況調査結果の分析等を活用する。	県（仙台市除く） 県全体	81.9 81.9	●79.8	82.1 82.5	●80.7
11	学習習慣形成に向け保護者や子どもに働きかける。	県（仙台市除く） 県全体	97.0 96.9	●96.6	85.4 86.4	○86.4

※全体として、前年度と大きな差はない。小・中学校ともに、「基礎的な知識・技能をきちんと身に付けさせる」「補充的な学習を授業に取り入れる」「基礎的な学習事項の反復練習をさせる」については、9割以上が「心がけている、どちらかといえば心がけている」と回答している。また、「コンピュータを活用する」「地域素材・地域人材を活用する」については、小・中学校で差が大きく、前年度と同様の傾向にある。

② 宿題をどのような考えで出しているか。

単位%

		小学校		中学校		
		H18	H19	H18	H19	
1	復習を中心に	県（仙台市除く） 県全体	84.7 84.1	85.1	69.2 67.5	66.8
2	予習を中心に	県（仙台市除く） 県全体	1.4 1.1	2.0	16.2 17.0	16.7
3	自主学習を中心に	県（仙台市除く） 県全体	11.1 12.0	10.9	11.0 11.9	10.9
4	その他	県（仙台市除く） 県全体	1.8 1.4	1.8	3.5 3.5	5.6

※小学校では「復習、自主学習、予習、その他」の順であるが、中学校では「復習、予習、自主学習、その他」の順になり、中学校は「予習」の割合が小学校より高い。

【保護者対象調査】

※調査対象（抽出）：小学5年生の抽出校の1学級の保護者（75校 1,620人）

※調査対象（抽出）：中学2年生の抽出校の1学級の保護者（60校 1,652人）

① 子どもの家庭での学習時間（平日）の保護者と児童生徒の回答の比較 単位%

	小学校		中学校	
	保護者	小5	保護者	中2
30分未満	24.1	24.5	28.4	27.6
30分以上	49.1	35.0	30.1	19.9
1時間以上	27.2	40.1	30.6	29.2
2時間以上(中学生)			10.9	22.7

※小・中学生と保護者との間に認識の差が見られる。

② 家庭での生活習慣（朝食を必ずとる、たいていとると回答した保護者と児童生徒の比較）

小学校		中学校		単位%
保護者	小5	保護者	中2	
95.0	96.3	93.7	92.8	

※小・中学生と保護者との間に認識の差はほとんど見られない。

③ 家庭での学習習慣を身に付けさせるため、家庭で心がけていること（複数回答）単位%

		小学校		中学校	
		H18	H19	H18	H19
時間を決めて勉強させる	県(仙台市除く)	32.6	31.2	18.0	19.7
	県全体	32.5		18.7	
子どもの努力をほめる	県(仙台市除く)	64.5	63.2	50.8	48.7
	県全体	64.9		50.9	
将来や進路の話をする	県(仙台市除く)	28.9	28.6	58.5	57.3
	県全体	29.2		57.9	
本や新聞を読むよう勧める	県(仙台市除く)	33.5	34.9	29.1	28.2
	県全体	34.7		30.1	
子どもに勉強を教える	県(仙台市除く)	33.5	34.7	11.9	12.9
	県全体	33.8		12.4	

※小学生の保護者は「子どもの努力をほめる」(63.2%)が最も多く、中学生の保護者は「将来の進路についての話をする」(57.3%)が最も多い。

④ 今後学校に望むこと（複数回答） 単位%

		小学校		中学校	
		H18	H19	H18	H19
年間授業時間の増加	県(仙台市除く)	39.7	42.9	31.6	35.7
	県全体	39.9		31.9	
放課後の補習学習の実施	県(仙台市除く)	32.8	35.7	42.4	41.6
	県全体	32.2		41.7	
個に応じた学習時間の増加	県(仙台市除く)	61.2	57.9	59.0	56.4
	県全体	61.3		59.3	
宿題の増加	県(仙台市除く)	24.9	23.5	24.7	30.4
	県全体	25.8		25.5	
個別の学習相談の増加	県(仙台市除く)	26.0	21.6	32.7	31.4
	県全体	24.8		32.8	

※小・中学校とも「個に応じた学習時間の増加」を最も望んでおり、また、「年間授業時間の増加」が前年度より増えている。

(6) 全国学力・学習状況調査との比較分析

平成19年度 小学校国語 国・県調査比較分析

No.		問題番号	問題内容	平均正答率	考 察
1	全 国	A 問題 1	漢字 ・読み3 ・書き3	95.8%	○取り上げられた語句が異なるので一概に正答率を比較することはできないが、同傾向の問題で結果も類似している。 ・国調査も県調査も「読み」に比べ、「書き」の方が正答率が低い。 ・「書き」については、国調査は「相談」、県は「覚える」の正答率が低い。
		1, 2		71.8%	
	宮 城 県	2 (1)(2)	漢字 ・読み3 ・書き3	84.5% 71.2%	
2	全 国	A 問題 3	指示語 ・選択2	92.4%	○国調査は、2文と4文からなる文章中の指示語の問題で、基本的な知識を問うものであり、県調査は、長文の中にある指示語で、2つの指示語を関連させて答える問題である。 ・県調査の方が、実践的で、知識の活用をみる問題であり、その結果から、本県の児童生徒は、日常で活用するための力は十分ではないと考えられる。
		1, 2		87.3%	
	宮 城 県	5 (3)	指示語 ・選択1 (2問関連)	36.8 (76.7%)	
3	全 国	A 問題 4	漢字辞典 ・選択1	80.8%	○国調査は、漢字辞典の使い方の基礎的な知識を問う問題であり、県調査は、実際に漢字辞典が使えるかを具体的に問う問題である。 ・国調査から、引き方の知識は身に付いていると判断できるが、県調査から、実際に辞典を活用できる児童は、引き方を知っている児童ほど多くはないと推察される。
		3 (2)		48.5% 7:59.4% 4:61.9%	
	宮 城 県	3 (2)	漢字辞典 ・記述1 (2問関連)		
4	全 国	A 問題 9	説明文要 旨 選択1	79.3%	○国調査と県調査とも説明文についての問題である。 ・国調査と県調査の違いは説明文の「長さ」である。国調査は5行(3文)であり、県調査は27行(16文)である。 ・問いの難易度に大きな差異がみられず、説明文の長さの違いが正答率の差に表れたと考えられ、本県の児童は長い文章の読解を苦手としていると推察される。
		5 (4)		45.7%	
	宮 城 県	5 (4)	説明文要 旨 選択1		
5	全 国	A 問題 10	物語文心 情 選択1	64.2%	○国調査・県調査とも、登場人物の心情を問題文中の言葉を基に読み取る問題である。 ・正答率は国・県調査とも低く、「心情」をとらえる力が十分ではないと判断できる。この理由としては、心情描写については、間接的な表現や複数の言葉と関連させて考える必要があるからと考えられる。
		4 (5)		40.1%	
	宮 城 県	4 (5)	物語文心 情 選択1		
6	全 国	B 問題 1	話し合い 記述2	60.5% 74.8%	○「話す・聞く」の領域の問題で、ともに「話し合い」を題材としているが、次の点で相違がある。 ・国調査が文章を読む「読解形式」であるのに対し、県調査は実際に聞いて答える「リスニング形式」である。 ・国調査は、進行の仕方を問う記述式問題で、県調査は、話し合いの内容と話し方の工夫を問う選択式問題である。 ・国調査より県調査の方が正答率が高いが、これは、国調査は解答方法が記述式であることが要因と考えられる。
		1		78.8% 83.6% 71.8%	
	宮 城 県	1	話し合い 選択3		
7	全 国	B 問題 2	書くこと 記述 三(2)	53.5%	○国調査は「ごみを減らす取組」、県調査は「勉強の大切さと学習時間」について、自分の考えを書く問題である。 ・国調査が意見文とグラフ、新聞を関連させた問題であり、県調査は2つのグラフから分かることや考えたことを記述する問題である。また、県調査の方が字数が多い。 ・国調査及び県調査の結果から、書ける児童と、書けない児童とが分化している傾向があると考えられる。
		三(2)			
	宮 城 県	6 (2)	書くこと 論述	56.0%	

○県調査は対象が中学2年生(仙台市含まず)、国調査は対象が中学3年生(仙台市含む)で、平均正答率は比較できるものではなく、あくまで傾向を把握するための参考として提示している。

平成19年度 小学校算数 国・県結果比較分析

(問題番号・平均正答率の【全国】は、全国学力・学習状況調査の県データを示している)

No.	問題概要	問題番号		平均正答率		考 察
		全国	宮城	全国	宮城	
1	小数のしくみと計算	A 1 (2)	3 (4)	85.5%	76.9%	○国調査も県調査も小数の乗法の計算ができるかをみる問題である。 ・国調査は平易であるが、県調査は、被乗数が小数であったり一の位が0になっており、積の小数点の取り扱いに慣れていないと正答に至らないよう作問されている。
	全国 27×3.4	宮城 5.6×30				
2	分数	A 3 (1)	7 (1)	96.0%	72.7%	○国調査も県調査も、数直線上において、等分してできる部分の大きさを問う問題である。 ・国調査は1を10等分し、県調査は1を7等分して、数直線上で示している。分数の大きさを単位分数の幾つ分かで表す経験は、10等分の方が7等分する場合よりも多く、国調査の方が平易である。
	全国 ・分数を数直線上に表すことができるかどうかをみる問題	宮城 ・分数を数直線上に表すことができるかどうかをみる問題				
3	計算のきまり	A 4	6	54.7%	55.2%	○国調査も県調査も、提示された式について理解し、その式にあった場面を選択する問題である。 ・国調査は小数の乗法であり、県調査は乗法と減法が混じった式で、県調査の解答には加減乗除の意味や計算のきまりについての理解が必要で、県調査の方が計算の決まりの理解度を見る上で精度が高いと考える。
	全国 210×0.6 ・式の意味を理解しているかどうかをみる問題	宮城 400-70×5 ・式の意味を理解しているかどうかをみる問題				
4	角の大きさ	A 6 (1)	12 (1)	84.9%	74.9%	○国調査も県調査も、基本的には、三角形の三つの角の大きさの和が180°であることを根拠にして、角の大きさを求める問題である。 ・問題の図形は、国調査が基本的な三角形、県調査が二等辺三角形で、県調査の方は解答への根拠が2つある点で違いはあるが、類似問題である。
	全国 ・三角形の3つの角の大きさの和が180°であることを理解しているかどうかをみる問題	宮城 ・三角形の3つの角の大きさの和が180°であることを理解しているかどうかをみる問題				
5	平行四辺形の性質	A 6 (2)	14	87.7%	59.8%	○平行四辺形を扱った問題であるが、問題内容には以下の相違点がある。 ・国調査は、問題の図にマス目があり、定義に基づいた辺の位置関係が捉えやすく、頂点が見付けやすくなっている。県調査は、対角線の性質を用いて解答する問題で、平行四辺形の性質の理解がより求められる問題であり、難易度が高い。
	全国 ・平行四辺形の定義や性質を理解しているかどうかをみる問題 ・平行四辺形の1つの頂点を選択する。	宮城 ・平行四辺形の定義や性質を理解しているかどうかをみる問題 ・対角線の長さを求め、正しい数値を選択する。				
6	面積	B 1 (2)	10	87.1%	53.9%	○国調査も県調査も、図形の面積を求める問題であるが、次の相違点がある。 ・国調査は、図から式を求めるもので、周りの長さを意識させてから面積を求めるというように設問が細分化され、平易である。一方、県調査は、式から考え方を問うもので、式に()があり、()の中の「- (マイナス)」の意味を「切り取る」と判断した誤答が多い。
	全国 ・L字型の図形の面積の求め方を表す式をよみとることができるかどうかをみる問題	宮城 ・複合図形の面積の求め方を表す式をよみとり図で表現することができるかどうかをみる問題				

○県調査は対象が中学2年生（仙台市含まず）、国調査は対象が中学3年生（仙台市含む）で、平均正答率は比較できるものではなく、あくまで傾向を把握するための参考として提示している。

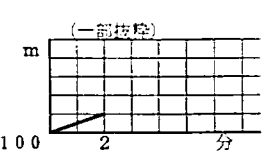
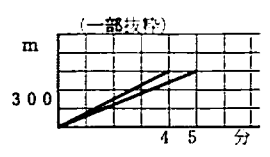
平成19年度 中学校国語 国調査・県調査比較分析

No.		問題番号	問題内容	平均正答率	考 察
1	全 国	A 問題 6 2	インタビューを する ・選択	82.3%	<p>○インタビューの内容を問う「話す・聞く」領域の問題であるが、国調査と県調査では、次の点で相違がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国調査がインタビューについて文章表現されたものを読む読解形式のものであるのに対して、県調査は実際に聞いて答えるリスニング形式の聞き取りである。 ・国調査では「インタビューが一問一答に陥っていること」を指摘できるかを問うているが、県調査は「一問一答に陥らず、多くの情報を引き出し話の内容を広げる工夫ができていること」に気付くかどうかをみる問題である。内容は基礎的事項であるが、総じて国調査より県調査の方が難易度は高いと考えられる。 ・国調査と県調査の結果から、生徒はインタビューについての知識はあるが、実際に聞き取る力は十分ではないと推察される。今後の指導の参考として欲しいところである。
	宮 城 県	1 (3)	インタビューを する ・選択	30.3%	
2	全 国	A 問題 8 「イ」	文の成分 の照応 ・短答式	87.4%	<p>○国調査は、副詞の呼応（「もし～たら」）の理解をみるものであり、県調査は、副詞の呼応（「まったく～ない」「まるで～ようだ」）の理解をみるものである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象とした副詞の違いはあるが、国調査と県調査は難易度は同程度と考えられる。 ・相違点は、国調査は記述式問題であり、県調査は2つの副詞の組み合わせを求める選択式問題であることである。 ・国調査・県調査ともに平気正答率が高いことから、本県生徒の副詞の呼応の理解は、良好な状況にあると判断できる。
	宮 城 県	3 (6)	副詞の呼 応 ・選択 (2問関連)	98.0%	
3	全 国	A 問題 8 「ア」「イ」	敬語 ・選択2	89.4% 86.3%	<p>○いずれも尊敬表現と謙譲表現の理解を問う設問である。国調査は「いらっしゃいますか」の尊敬表現、「イ」は「ご連絡します」の謙譲表現を問い、県調査は、「いらっしゃいますか」の尊敬表現と「拝見する」の謙譲表現を問う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「いらっしゃる」の尊敬表現について問うている点では同内容と言える。 ・県調査はその2つを関連させ、尊敬表現と謙譲表現をともに理解してともに正答して正解としているため、国調査より難しいと考えられる。 ・敬語については、小学校5、6年でも扱っていることを考えると、基礎・基本は十分ではないと推察される。
	宮 城 県	3 (8)	敬語 ・選択 (2問関連)	23.2%	
4	全 国	B 問題 1 三	書くこと ・記述	75.2%	<p>○国調査では、ロボットについて発表する原稿（説明的文章）を読むとともに、ロボットに関する複数資料を活用して、根拠を挙げて意見を書けるかをみる問題である。県調査は2つのグラフから情報を読み取り、それを根拠に挙げながら意見を書けるかをみる問題で、問題内容は似ている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国調査は、問題文の中に答えに当たる部分があること、字数指定がないことなどから、県調査に比べ解答しやすいものと考えられる。 ・県調査では無答率が16%を越えており、まとまった文章を書くことに慣れていない傾向がうかがわれる。
	宮 城 県	6 (2)①	書くこと ・論述1	60.5%	

○県調査は対象が中学2年生（仙台市含まず）、国調査は対象が中学3年生（仙台市含む）で、平均正答率は比較できるものではなく、あくまで傾向を把握するための参考として提示している。

平成19年度 中学校数学 国・県調査比較分析

(問題番号・平均正答率の【全国】は、全国学力・学習状況調査の県データを示している)

No.	問題内容	問題番号		平均正答率		考 察																															
		全国	宮城	全国	宮城																																
1	正負の数 ①整数の四則計算 ②分数を含む除法 ③累乗を含む乗法	A 1 (4)	1 (1)	71.9%	72.7%	○国調査も県調査も、四則計算や分数、累乗についての問題であるが、次の相違点がある。 ・国調査と比べ、県調査には、負の数の除法による符号の判断、除数が仮分数、約分を必要とする要素が付加されている。複数の要素に惑わされることなく、計算の意味や仕方をしっかりと踏まえないと正答とならない。この点で、県調査の方が、正負の数についての総合的な力を見る上で、精度が高いと考える。																															
	全国 ① $8-5 \times (-6)$ ② $2/3 \div 5/7$ ③ $2 \times (-3)^2$	宮城 ① $(-7)+2 \times (-3)$ ② $(-12) \div (-4/3)$ ③ $-5 \times (-3)^2$																																			
2	文字式の計算 ①整式の加法と減法 ②等式の変形	A 2 (1)	1 (4)	69.3%	66.1%	○「正式の加法と減法」については、国調査も県調査も、ほとんど同じ問題内容で、難易度も同程度である。 ○「等式の変形」については、国調査も県調査、等式の性質を用いて目的にあるよう式を変形することができるかを見るものである。 ・国調査は記述式であり、県調査は選択式である。																															
	全国 ① $(2x+7y)-2(x-3y)$ ② $2x+3y=9$ を y について解く	宮城 ① $(3x-5y)-2(x-4y)$ ② $6x-2y-1=0$ を y について解く	2 (4)	3 (2)	53.9%		54.2%																														
3	連立方程式の解き方 ①簡単な連立方程式 ②連立方程式の立式	A 3 (4)	4 (1)	70.0%	70.1%	○「簡単な連立方程式」については、国調査も県調査も、ほとんど同じ問題内容で、難易度も同程度である。 ○「連立方程式の立式」は、国調査も県調査も、具体的な事象における数式の関係をとらえ、連立一次方程式を立式できるかどうかをみるものである。 ・国調査は「品物の代金と買い求めた数」、県調査は「男女生徒の合計数とその割合」を求める。県調査は昨年度、国調査と同様の問題を出題しており、正答率は72.9%であった。 ・今年度の県調査は、百分率を用いた割合で解答を求めており、国調査より難易度が高い。																															
	全国 ① $\begin{cases} 5x+7y=3 \\ 2x+3y=1 \end{cases}$ ② 1個120円のりんごと1個70円のオレンジを合わせて15個買った時、代金の合計は1600円になりました。	宮城 ① $\begin{cases} 2x-3y=13 \\ 5x+2y=4 \end{cases}$ ② ある中学校の2年生は男女合わせて158人います。そのうち男子の25%と女子の10%は自転車通学しており、その人数の合計は29人です。	3 (3)	5	71.2%		37.5%																														
4	比例と反比例 ①反比例の表を完成する ②反比例のグラフの特徴 ③グラフから速さを求める	A 10 (1)	9	43.2%	47.0%	○「反比例の表を完成させる」問題の誤答として、0または3と解答した割合が高い。 ・いずれも反比例の特徴である「対応する x 、 y の値の積が一定になる」ことの理解が不十分であると考えられる。 ○「反比例のグラフの特徴」は、表、式、グラフの関係を理解しているか問う問題である。 ○「グラフから速さを求める」問題では、国調査は1つのグラフを示し、2分経過した時に100m進んだことが、県調査は2つのグラフを示し、4分経過した時に300m進んだことが解法の手がかりとなる。 ・県調査の方が、複数の情報の中から情報を選択し、活用する力を測れる問題である。																															
	全国 ① <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>x</td><td>・</td><td>-2</td><td>-1</td><td>0</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td></tr><tr><td>y</td><td>・</td><td>-6</td><td>-12</td><td>×</td><td>12</td><td>6</td><td>□</td></tr></table> ② 図表 (略) ③ 	x	・	-2	-1		0	1	2	3	y	・	-6	-12	×	12	6	□	宮城 ① <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>x</td><td>・</td><td>-2</td><td>-1</td><td>0</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td></tr><tr><td>y</td><td>・</td><td>-9</td><td>-18</td><td>×</td><td>18</td><td>9</td><td>□</td></tr></table> ② 図表 (略) ③ 	x	・	-2	-1	0	1	2	3	y	・	-9	-18	×	18	9	□	10 (2)	10
x	・	-2	-1	0	1	2	3																														
y	・	-6	-12	×	12	6	□																														
x	・	-2	-1	0	1	2	3																														
y	・	-9	-18	×	18	9	□																														
		12 (1)	12 (1)	76.2%	50.6%																																

○県調査は対象が中学2年生(仙台市含まず)、国調査は対象が中学3年生(仙台市含む)で、平均正答率は比較できるものではなく、あくまで傾向を把握するための参考として提示している。

Ⅲ 「授業改善のヒント」の活用の手引

本章及び次の章では、各教科の詳細な結果分析に基づき、本県児童生徒の課題を明らかにするとともに、授業改善のための具体的な取組について提案を行っている。

以下に示す各項目のねらいを踏まえ、授業改善のために各学校で活用されるよう期待するものである。

1 県全体の状況

- (1) 正答率 60%以上の問題の割合
 - ・本県が「学習内容の定着の目安」としている「正答率 60%以上の問題の割合」について、平成19年度の割合を示している。(参考として平成18年度の割合も示す。)
 - ・正答率の各段階の割合も示している。「正答率 40%未満」の問題について特に注意して見る必要がある。
- (2) 観点別正答率
 - ・教科の観点別の正答率を示している。
- (3) 出題形式別正答率
 - ・教科の出題別の正答率を示している。
- (4) 問題内容別正答率
 - ・問題の内容別の正答率を示している。

2 定着が良好な領域や単元等

- ・十分に定着しており、一層の向上が期待される領域や単元等を示している。

3 指導法の工夫改善が必要な領域や単元等

- ・定着が不十分であり、指導法の工夫改善が必要な領域や単元等を示している。
- ・具体的問題を取り上げ、「授業改善のヒント」を示している。

4 授業改善のヒント

- (1) 問題の概要
 - ・指導法の工夫改善が必要な問題の概要を、過去の類似問題も含めて示している。
- (2) 正答率が低い要因（小学校社会は「正答に至らない場合の要因」）
 - ・問題の内容や出題形式、児童生徒の学習傾向や理解の状況などのつまずきの要因を分析し、指導上の留意すべきポイントを明らかにしている。
- (3) 授業改善のヒント
 - ・正答率の低い要因を踏まえ、どのように指導法を工夫し、授業を改善していけばよいのか、具体例を添えて示している。
 - ・学年部会や教科部会などで検討を加え、組織として具体的授業改善に取り組み、児童生徒に「分かる喜び」を味わわせることが必要である。

5 教科の問題ごとの詳細データ

- (1) 「領域」「問題の内容」「出題のねらい」
- (2) 「予想正答率」「県正答率」
 - ・自校の正答率と「予想正答率」「県正答率」とを比較し、これまでの授業改善の取組を振り返り、成果と課題を把握することにより、一層の学力向上に結び付けていく資料としての活用が求められている。
- (3) 「誤答率」「無答率」
 - ・今後、重点的に授業改善を行うために特に「無答率」に着目することが必要である。
- (4) 「市町村別正答率分布」
 - ・乖離の大きい問題については、充てている指導時数が十分かどうかの検討が必要である。

6 各教科の問題について

各教科の出題の特徴について概要を示すので、「授業改善のヒント」を活用するに当たり、参考とすることを期待する。なお、どの教科においても、一定の割合の経年比較問題を取り入れて出題をしている。また、各教科のねらい・出題の特徴は以下のとおり。

教科	出題の特徴
小学校 国語	「話す・聞く」領域については、実際の話し合いを聞き取ることで、必要な事柄を簡潔にメモにまとめたり、話し合いの概要を把握する力を主にみようとした。また、よりの確に読解力を把握するために、「読むこと」の領域に、「1つの問いに対して2つの答えを要求する問題」や「2つの問いを関連させて答える問題」を取り入れた。「書く」領域においては、昨年度までの「紹介文」ではなく、グラフの読解による「意見文」を取り入れた。
小学校 社会	「人々の健康な生活や安全を守るための諸活動」「人々の生活の変化にかかわる問題」では、主に、その理解度を確かめる問題を出題した。また、「地域の地理的環境や我が国の産業にかかわる問題」では、主に、観察・調査時の態度や地図・統計表など各種の資料を活用する力の定着度をみる問題を出題した。
小学校 算数	情報を取り入れ読み解く力を把握するため、式やグラフの特徴を読み取ったり、図形を説明したりする問題を取り入れた。また、数学的な考え方を活用しながら解決する問題を出題した。
小学校 理科	基礎・基本となる知識・理解とともに、情報を取り入れ読み解く力を把握するため、教科書に掲載されている実験・観察を多く採りあげ、科学的思考や技能・表現をみる問題を出題した。
中学校 国語	「話す・聞く」の領域については、実際にインタビューの様子を聞き取ることで、必要な事柄を簡潔にメモにまとめたり、適切な表現による目的に沿った質問の仕方を理解しているかどうかを主にみようとした。「書くこと」の領域については、2つのグラフを読み解き、自分の考えを表現する力をみるために出題した。「言語事項」の領域については、新たに「語の組み立て」と「副詞の呼応」を取り入れた。
中学校 社会	地理的分野では、多彩な地図やグラフを用いて、地理的事象を地図と関連させて理解しているかを見ようとした。また、歴史的分野では、年表を用いて、歴史の大きな流れの中で歴史的事象をとらえているかを見ようとした。また、資料活用能力をみるため、写真資料を多く用いた。
中学校 数学	「数と式」「図形」の領域では、原理や法則に裏付けられた確かな知識、技能として基礎的・基本的な事項が身に付いているかを確かめる問題を出題した。(例えば、「数と式」の領域では、「負の数」や「逆数」用いても正しく計算できるかをみた。)また、「数量関係」では、基礎的・基本的な内容に加え、日常的な事象から必要な情報を読み取って解く問題を出題した。
中学校 理科	情報を取り入れ読み解く力を把握するため、教科書に掲載されている実験・観察を多く採りあげ、観察、実験条件や資料を適切に読み取り、その結果を考察する問題を多く出題した。それに伴い、「科学的思考」と「技能・表現」に関して問う問題を昨年度より増やしている。
中学校 英語	「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の3領域とも、基礎・基本を重視した問題を出題し、それぞれの領域の力をみようとした。「聞くこと」の領域については、実際に英文を聴いて解答を選択する問題を、昨年に引き続き出題した。「読むこと」の領域については、対話文と簡単な記録文を用いて出題した。「書くこと」の領域については、英作文の力を把握するため、自分の思いを3文以上の英文で表す自由作文を出題した。